

「マザーナイルプロジェクト」

在スーダン日本国大使館

アフリカ北東部スーダンにおいて日本は、母親による安全なお産を支援し、出産前後の母子栄養指導などを行うコミュニティ助産師の育成・指導を2008年以降継続しています。これまでに約6,500人、スーダン全土の約半数にあたる助産師が、日本の支援で身に着けた知識や技術を生かして、新たな命の誕生を支えています。

スーダンでは長い内戦が続いた後、2005年に和平合意に署名されました。当時、その保健水準は低く、特に母子保健に係る指標は、妊産婦死亡率590人（10万人中）、乳児死亡率62人（千人中）、5歳以下死亡率90人（千人中）（2007年）の低水準にとどまっていた。

日本は、2007年にJICA事務所を再開、この状況を改善するために2008年から、「フロントライン母子保健強化プロジェクト（通称：マザーナイルプロジェクト）」を開始しました。スーダンの地方では、女性が村の外に出ることを好まないため、保健施設ではなく自宅で出産する母親が、今も多くみられます。この母親たちのお産を介助するのが、地元コミュニティに根付く助産師です。このプロジェクトで日本は、助産師の技術力の向上を目指し、スーダン政府とともに必要とされる教育研修プログラムの実施を支援しました。

このプロジェクトの通称は、「マザーナイルプロジェクト」。

スーダンは、ウガンダから流れる白ナイル川とエチオピアから流れる青ナイル川の合流点にスーダンは位置しますが、広大な大地に大きな恵みをもたらす母なる川（マザーナイル）にちなんで、母親たちが安全なお産を迎えられるようにと願って、このニックネームがつけられました。

日本人専門家は、正しい知識、より良い技術を助産師に身に付けてもらうため、スーダン保健省のスタッフと共に、研修カリキュラムやテキスト作りに奔走しています。こうして作られたカリキュラムは、日本だけではなく、他の国や団体が支援するプロジェクトでも使用されています。

2008年、南スーダンとの国境地域センナール州で始まった「マザーナイルプロジェクト」。その後、少しずつその内容を変えながら「マザーナイルプロジェクトフェーズ2」、「マザーナイル・拡大支援プロジェクト」と現在まで続いています。

2019年までの間に日本が支援した研修を受けた助産師の数は約6,500人で、スーダンにおける全助産師約13,500人（2016年）のお

およそ半分に該当します。

研修を受け、正しい知識と技術を身に着けた村落助産師は、広大な全国に展開中です。病院のない小さな村でも、地域の母親たちが安全なお産を迎え、子供たちが健やかに成長できるのは、助産師が地域に密着し、日本の協力で身に着けた知識や技術を生かして、今日も活動を継続しているおかげなのです。



(了)